

TOP COLLECTION:
THE ILLUMINATION OF LIFE BY DEATH
— MEMENTO MORI & PHOTOGRAPHY



TOPコレクション

メメント・モリと写真

— 死は何を照らし出すのか



2022年 6月17日[金]→9月25日[日]

東京都写真美術館2階展示室 [恵比寿ガーデンプレイス内]

開館時間: 10:00 - 18:00 (木・金は20:00まで) ※入館は閉館の30分前まで

休館日: 毎週月曜日(月曜日が祝休日の場合は開館、翌平日休館)

主催: 東京都、公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都写真美術館

上: ハンス・ホルバイン(子)『死の像』(試し刷り)より《老婆》[部分] 1523-26年頃 木版 国立西洋美術館蔵

下: マリオ・ジャコモリ『やがて死がやってきてあなたをねらう』1954-68年 ゼラチン・シルバー・プリント 東京都写真美術館蔵

Courtesy Archivio Mario Giacomelli ©Rita e Simone Giacomelli

TOP MUSEUM

TOP コレクション

メメント・モリと写真

— 死は何を照らし出すのか

TOP COLLECTION:

THE ILLUMINATION OF LIFE BY DEATH

— MEMENTO MORI & PHOTOGRAPHY



小島一郎《つがる市稲垣付近》ゼラチン・シルバー・プリント 1960年 青森県立美術館蔵

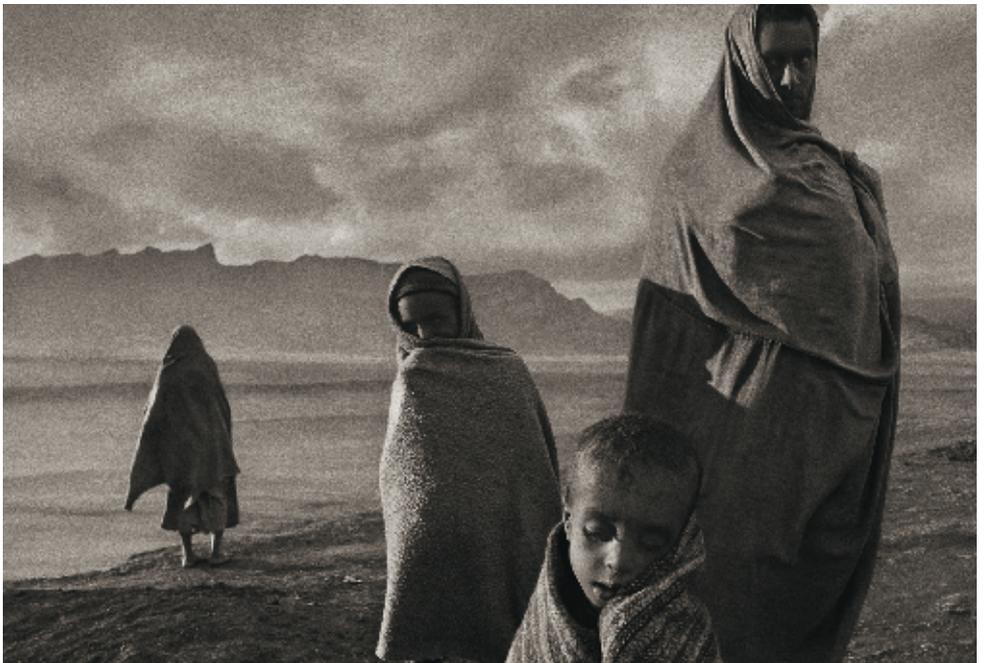
「メメント・モリ」は、人々の日常がいつも死と隣り合わせであることを示す警句でした。ラテン語で「死を想え」を意味するこの言葉は、中世ヨーロッパのキリスト教世界において、骸骨と人間が踊る様子を描いた「死の舞踏」と呼ばれるイメージと結びつき、広く伝播していきます。その背景には、中世の人々が、伝染病、戦争、飢餓といった困難に直面し、誰も経験できない死を、目に見える形にしようとしたことが伺えます。

写真もまた、目に見えないものを写し出します。それは、私たちの意識を越えた瞬間であり、死と同じように存在の根源的な謎であり、人間が、もろく、うつろいやすい時間のなかにあることを示しています。そして、中世の人々が、死の図像を介して、誰もが死すべき運命であることを自覚することで、逆に生きることへの積極的な意味を見出そうとしたように、現代を生きる私たちもまた、写真のなかに、「かつてあった」時間の集積を見ることで、あらためて生きることと向き合うことができるのかもしれません。

本展では「メメント・モリ」をテーマに、当館のコレクションを中心に、写真および版画作品を通して、人々がどのように死と向き合い、どのように豊かに生きてきたかを探ります。



藤原新也《死のとき、闇にさまようか光に満ちるか心がそれを選びとる》〈メメント・モリ〉より 1972年 発色現像方式印画 ©Shinya Fujiwara



セバスチャン・サルガド《コレム、エチオピア(砂漠の4人)》1984年 ゼラチン・シルバー・プリント ©Sebastião Salgado



ロバート・キャパ《オマハ・ビーチ、コルヴィエ・シュール・メール付近、ノルマンディー海岸、1944年6月6日、Dデイに上陸するアメリカ軍》1944年 ゼラチン・シルバー・プリント



ロバート・フランク《ミシシッピ川、バトン・ルージュ、ルイジアナ》1955年 ゼラチン・シルバー・プリント ©Andrea Frank Foundation, from The Americans

ハンス・ホルバイン(子)『死の像』(試し刷り)より《貴婦人》[部分] 1523-26年頃 木版 国立西洋美術館蔵

※所蔵表記のないものはすべて東京都写真美術館蔵

観覧料: 一般700円/学生560円/中学生・65歳以上350円 小学生以下、都内在住・在学の中学生および障害者手帳をお持ちの方とその介護者(2名様まで)は無料。
*本展はオンラインによる日時指定予約を推奨いたします。*事業は諸般の事情により変更することがございます。最新情報は当館ホームページでご確認ください。

東京都写真美術館
TOKYO PHOTOGRAPHIC ART MUSEUM



JR 恵比寿駅東口より徒歩約7分、
東京メトロ日比谷線恵比寿駅より徒歩約10分。
*当館には駐車場はございません。近隣の有料駐車場をご利用ください。

〒153-0062 東京都目黒区三田1-13-3 恵比寿ガーデンプレイス内 Tel: 03-3280-0099 www.topmuseum.jp